

山勤めと 幼少の記憶



兵越峠～青崩峠歩道にて (令3.4)

特集
水窪の人と暮らしの軌跡

■熊谷 修さん■

★昭和三二年生 水窪町長尾在住
★昭和三八年 水窪営林署に就職

・ 定年後も非常勤職員として国有林のパトロールや登山道整備を実施

「水窪の山と生きる」

「あの山は黒法師でその横が丸盆
そんでその尾根を超えていくと・・・」

水窪の山を熟知している熊谷さん。一緒に山を歩くと、遠くの山を指さしながらすらすらと山の名前が出てきます。山のことを知りたい私にとっては、長年水窪の山を見続けてきた熊谷さんから学びたいことは山のようにあります。

水窪には色々な分野で深い経験と知恵を持っている方がたくさんいらしゃいます。こういった方々のお話を深く伺うことで、自分も水窪のことを語り継ぐことができる者の端くれになれたらいいなと思い、取材を始めました。

皆さんにとってもこれらのお話が新たな発見になれば幸いです。

※ できる限りご本人の言葉のまま、語り口調の文章にしました。
(-) 書きで一部補足をしています。



鹿の平にて (令3.7)

■国有林の仕事と思い出

営林署に入ってから、森林鉄道の保線とか集材機や重機の運転もやったし、たいていのことは経験したね(※)。

駆け出しの頃、盆や正月で山を下りるときには、班の人(臨時雇用の作業員)がおこづかいをくれるのが嬉しかったよね。ご苦労様でしたって。あの衆は出来高だからやればやった分(報酬を)もらえるからね。おらは常用だから定額だったけど。伐採する衆も材を運ぶ衆も出来高だっつね。その日の作業終わりの時分になると「晩酌代!」つってちよつとだけ余分に仕事してたよね。

【※解説】当時は山奥の木を索道(ワイヤーで吊り下げた輸送機器を使って物を運ぶ仕組み)や簡易な軌道(鉄道)を使ってある程度のところまで下ろし、そこから森林鉄道の本線に積みかえて町の貯木場まで運んでいました。

貯木場を起点に二キロメートルほどあったそうですが、水窪ダムの建設や林道の整備に伴い昭和三九年に全線が廃止になっています。

森林鉄道





盤台：索道に荷掛けする場所（昭32年）



水窪貯木場（昭30年）

幼少の記憶 〜山と遊び〜

（子供の時分には）子供がおったおった。遊ぶことは多かった。自分らで竹馬つくったり手裏剣作ったり。とんでもない山の方で遊んでいた。山にある作り畑（焼畑）で子供だけでも遊んでいた。親もあんまり心配しなかった。西浦の「はくりや」の下あたりで、水かがみ（水中をのぞく道具）を使って遊んだね。一日中遊んだ。面白かったね。

多いから子供と大人が知り合いになるね。（山仕事の場合だと）一つの山を庄屋が買うと一月も三月も（林業の作業員が）ずっといるしね。休みも皆一緒だからお祭りとか行事もやりやすかったよね。学校帰りに貯木場に寄っては森林鉄道に乗って遊んだよね。森林鉄道の線路に耳付けたりして遊んだね。音が響いて面白かったね。

正月と盆になると森林鉄道に乗って営林署の人が降りてきて手をふった。あの頃は営林署って呼ばずに御料の衆って言った。（今は「森林管理署」）。

幼少の記憶 〜牛も家族と一緒に〜

田んぼを耕すために牛を飼ってたね。牛乳背負っては牛乳工場に行ったね。うちの中に牛小屋があったよ。家族と一緒にだわいね。炊事場に土間があって、そこに牛や馬が顔を出してたね。牛乳は売るため。牛のたい肥を使ったキビ（とうもろこし）はうまかったね。



熊谷さん夫婦：山に生きる会イベントにて

編集後記

取材内容以外にも熊谷さん夫婦と思い出話に花を咲かす楽しい時間でした。奥さんの道子さんは中日新聞の投稿欄に何度も採用されていて、過去の投稿もたくさん見せていただきました。その中のひとつを最後に紹介させていただいて、今回の特集を終わりたいと思います。

「もう一箸おくれ」

「もう一箸おくれ」この素敵な言葉に心躍らされたのは、四十年ほど前のことでした。小麦畑が黄金色に輝くころは、祖父が一番活躍した季節でした。印籠ときせるを腰に付け野良仕事に。昼時、大きなしわだらけの手の中に納まった茶碗を高々と掲げて「もう一箸おくれ」と私の目の前へ。上品なすてきな言葉を初めて耳にして感動したことを覚えています。

大好物の魚を前に、お代わりする祖父。目をつむり、味をしっかりとみしめているかのように食べている祖父の顔を、かしわ餅を作りにながらふと思いつかべました。祖父と一緒に暮らした七年間、わが家流の農事歴や年中行事を教え込まれました。その行事の一つが、今回祖父を思い出すきっかけとなったかしわ餅作りでした。「もう一箸おくれ」。現代離れたこの言葉は、ご飯を盛りつける私を古い時代へと導いてくれるようなわくわくした気分になしてくれました。

祖父は既に亡くなってしまいましたが、「もう一箸おくれ」と私も言ってみたくて、このすてきな言葉を胸の中でずっと温め続けています。

そしていつか誰かに聞いてもらいたいと思っています。

熊谷 道子

（平成二三年六月 中日新聞掲載）

<連絡先> 栗島：080-1623-0565 水窪協働センター 地域振興グループ：053-982-0001

ホームページはコチラ！▶▶ <https://www.tenryu-misakubo-life-yamaiki.com/>



水窪の人、暮らしの取材を進めています。この人取材してほしい！などありましたらいつでもご連絡ください。